



ときめき軽音部

ヒミツの放課後レッスン

大泉りか

挿絵 / santa

立ち読み版



Contents

目次

第一章	えり先輩のご奉仕リップ……………	4
第二章	イケナイ人妻教師の筆下ろし……………	61
第三章	爆乳JKのパイずり奉仕で3P……………	144
第四章	真夜中のセッション 美少女ボーカリストの処女喪失……………	188
第五章	打ち上げはハーレム乱交!……………	242

登場人物

Characters

大木 浩太

(おおき こうた)

高校一年生。バンドに憧れてギターを始めるが、引っ込み思案な性格からいつも一人で練習している。

坂野 あき

(さかの あき)

浩太のクラスメイト。素直ではきはきとした性格の美少女。バンド『クリームソーダ』のボーカル担当。

坂野 えり

(さかの えり)

あきの姉。三年生。明るく活発で面倒見のいい性格。『クリームソーダ』のリーダーでドラム担当。

因幡 明日香

(いなば あすか)

三年生。おっとりとした天然少女。豊かなバストを持つ。『クリームソーダ』のベース担当。

大川 静子

(おおかわ しずこ)

軽音部の顧問。妖艶な大人の色気を纏っていて、男子生徒からの人気は高い。

「な、何をですか？」

「キスだよ。キスくらいしたら、きっと女の口に免疫がつくと思うんだ」

驚きの発言だった。まさかキスをしようなどと、誘われるだなんて……。

(ど、どうしよう……)

胸がどくと大きく鼓動した。

いつかは誰かとすることになるのか、とぼんやりと思い描いていた憧れの行為。それが急に現実感をもって身に迫ってくる。ウキウキと心が浮き立ち、高揚感が押し寄せてくる。

が、一方では、戸惑う気持ちもあった。

キスというのは、普通は付き合っている間柄でするものではないのか？

(でも……そういうところがウブとか言われる原因なのかも)

カッコつけるわけではないが、そんなふうに使われているのは、浩太の中の男としての矜持みたいなものが傷つくし、少ししやくだ。

「ちよつと君、何黙ってるの？」

ぐるぐると思考を巡らせている浩太に、不貞腐れたように、えりが唇をとんがらせた。

「あ……すみません」

「すみませんじゃなくって。女の口に恥、搔かせないでよね。せつかく君のためを思つて提案してあげたのに。黙つていられたら断りたいって思つてるのかなって……傷つくじゃない」

えりは目を伏せると、いつもとがらりと変わった、か細い掠れた声で呟いた。

「そつ、そういうつもりじゃなくって……」

「じゃあ、どういうつもりなの？」

「えつと……それは……」

慌ててフォローするように繕うが、えりは今にも泣きだしそうに睫を揺らしている。

(ど、どうしたらいいんだろう……)

途方に暮れていると、えりが舌をぺろつと出して顔をあげた。

「なーんてね。君、真面目だね、すぐに本気にしちゃつて」

「えつ……あつ！」

からかわれていたのだ。

そうわかつた瞬間に、急に恥ずかしさに襲われて顔がかあつと熱くなった。

「真面目なもの、ウブなものも悪くないけどね。可愛くつて。ほら、こつちおいで」

すつかりえりのペースに巻き込まれ、言われるがまま歩み寄ると、えりも立ち上が
り、ぐるりとドラムセットの前に回り込んできた。そして、浩太の前に立つと、ふつ

と瞼を落とすし、目を細めて、浩太の両頬を手で包み込んで唇を寄せた。

(あつ……！)

瞬きしたえりの睫がふさふさと揺れ、笑顔を作るようにきゅつと口角があがった。頬にぴとりと当てられた手に力が込められて、そのままえりのほうへと引き寄せられる。

えりの唇が、浩太の唇に押し当てられるまで、ほんの一瞬のことだった。けれども、浩太の目には、すべての動きがまるでスローモーションのように見えた。

(う……わぁ……柔らかい)

重ねられた唇は、びっくりするほどに柔らかかった。まるで、ふわふわに泡立てた極上のホイップクリームのように滑らかで、しっとりとしている。

(すごい……これが……キスなんだ……)

胸に押し寄せてくる感激に、足元がふわふわとして、雲の上にいるようだった。キスを経験できたという喜びと、そのものの甘美な感触に夢心地の思いだ。

(えり先輩……)

さつきまで綺麗だとは思っていたものの、ただの部活の先輩であったえりが、急に近しく、また、親愛を感じられた。

(なんて……なんて気持ちがいいんだろう……)

年上の少女の唇は驚くべき柔らかさで、わずかに開いた唇の間からは熱く湿った吐息が漏れてくる。そのシロップのような甘い唾の匂いに胸がジンジンと痺れて、もつと味わいたいとじれったく胸が騒ぐ。

しかし、えりの唇はあっけなくも離れてしまった。

「……これがキスだよ。ちよつとお子さま用だけだね」

えりは浩太の両頬に手を当てたまま、ふざけた口調で言った。キスの余韻にぼんやりとしながらも、その美味しい味を知ってしまったゆえに、寂しさが襲ってくる。

(もう一回……したいな……)

えりの唇をもう一度味わいたい。胸の中には、そんな欲望が芽生えていた。

けれども実行に移すこともできず、えりの唇の感触を思い出すように唇に指先を運ぶと、無意識になぞっていた。

「やだ、そんな顔して。君、まだしたりないんだ？」

そんな態度が物欲しげに映ったのか、えりは悪戯っぽい目で浩太の顔を覗き込むと、くすりと笑った。

「いや……だつて……すぐ気持ちよかつたから……」

「じゃあ、もう一回してあげる。今度はもうちよつとオトナなやつ」

えりは手を伸ばすと、浩太の首に手を回して抱きつく。そうしてぎゅつと身体を押し

し付けると再び唇を寄せてきた。

(ん……んんっ……)

むにむにっとした唇の感触と温かな吐息に、胸がきゆうっと絞られるように疼いた。えりの胸の膨らみが、胸板に柔らかく当たり、すーはーと息をする度に上下するのが感じられる。

(あ……ああっ……すごい……)

『オトナのヤツ』とえりが予告した通り、浩太の唇を濡れた舌がれろりと撫でたかと思うと、するつと中へと入り込んできた。

(はぁあっ……)

唾液をたっぷりとまとった舌は、ぬるりと滑らかで、ほのかに甘い涎がとろりと浩太の舌に絡まるようにまとわりつく。口内に満ちている唾は、みぞれ味のシロップを薄めたような風味だった。

(美味しい、えり先輩のキス、すつごく美味しい……)

もっと味わいたいという情動に突き動かされて、浩太もそろそろと舌先を伸ばすと、ぷるんとした唇に触れた。

(あ……あぁっ……あぁっ……)

さくらんぼのように瑞々しくふつくらとした唇を舌先でつんとつつき、ふわりと緩

んだ口元から舌をゆっくりと差し込むと、濡れた粘膜の温かさを感じながら、奥へと進ませる。

「ん……」

前歯を通り越して、その奥へとたどり着くと、えりが小さく声を漏らした。

その声が可愛らしくて、腰に回した手にぎゅつと力を込めると、身体がさらに密着し、制服越しにどくんどくんという心臓の鼓動が伝わってくるようだ。

(すごい……この感じ……すぐく気持ちいい……)

胸は高揚し、どくどくと高鳴っている。甘いときめきが心を蕩かしながらも、もつともつとと気が逸って苦しい。

焦る思いを抑えながらも、必死に少女の口内を舌べろで搔き回す。

舌の裏に触れると、つるつるとよりなめらかだった。そのすべらかな感触を味わおうと舌でなぞってみても、ちゅるりちゅるりと滑りよく、逃れてしまう。

「はぁ……んんっ……」

えりが喉を鳴らして吐息を漏らした。

そつと薄目を開けて表情を窺うと、きゅつと閉じられた臉が目に入った。

ふちをぐるりと囲むように生えている長い睫が、ふるふると揺れているのを見た瞬間に、愛おしさがまた募る。ぎゅつと密着した身体のぬくもりに、股間が熱を持って

強張り始める。

(ああっ……どうしよう……こんなにくっついていたら……勃ったらバレちゃう……)

早く身体を離さなくては。そう頭ではわかっているが、一方でこのまま、少女の唇と、身体の熱を感じていたいという気持ちに抗うことができない。

もう少し、もう少しだけ……。

欲情に囚われたまま、えりの口内を貪っていると、完全に勃起してしまった。

(ああっ、もうヤバイ……)

コントロールを失って、こんなふうには身体が言うことを聞かないなんて初めての経験だ。引き裂かれそうになりながら、どうしようもできずにいると、ふと下腹部にふわりと何かが被さった。

(えっ!!)

驚いて目を大きく見張ると、えりがふつと臉を上げた。きゅつと目を細めて微笑むと、浩太の肩に顔をうずめて低い声で囁く。

「……おちんちん、勃っちゃったんだ。可愛いね」

「え……あの……これは……その……ひゃっ!」

下腹部でもぞもぞと何かが動いた。びくつと勝手に腰が動いてしまい、えりがまた

くすくすと忍び笑いを漏らす。

「キス、そんなに気持ちよかったんだ？」

「……はい」

「嬉しいな。あたしのキスで、おちんちん、こんなふうにしちゃうだなんて」

えりが人差し指と中指とを揃えて、付け根から先端に向かつてすつと撫で上げた。きゆうつと下腹部に緊張が奔ると同時に、陰茎にどくんとさらに血が流れ込む。

「うひゃっ！」

みつともない声を上げてしまい、慌てて身をすくめると、上級生は耳たぶに唇が触れるほどの距離で囁いた。

「触って欲しい？」

「あ……う……」

「欲しいんだったら、ちゃんと行って」

「ううっ……あつ、あの……触って欲しいです……」

まるつきりペースに巻き込まれたままだが、それはそれで心地がいいのは、さばさばとしたえりの性格のせいだろうか。

（僕にもお姉さんがいたら、こんな感じだったのかな）

姉どころか、きょうだいもない一人っ子の浩太にとって、年上の女性とこうして

親密に話すのは、こそばゆく、なんとも心が浮き立つ。

「うふふ。素直でいいコだね」

ウブな年下の少年の反応に、えりは満足したような笑みを浮かべると、再び浩太の股間に指先を伸ばした。

(うっ……ひゃうっ……)

えりの指先が裏筋をつーつと辿り、先端まで行き着くと亀頭をすっぽりと包み込んだ。そうして、今度は手のひらで陰茎を包んだまま根元へと下がっていく。

(うっ、ううっ……うっ……)

布越しの感触がもどかしかった。

が、逆にそれが焦らされているようで、うずうずしてしまふ。できることなら直接触れて欲しい。けれど、もしも言い出して拒否されたら、と思うと尻ごみしてしまう気持ちもある。

(う……でも……でも、我慢できない！)

悶々とするおしい思いでいる浩太の、制服のズボンのチャックにえりの手がかかり、つーつと下げられる。

「こうやって、自分から責めるのとかって初めてだけど、ちょっと楽しいかも」

「そ……そうなんですか？」

「うん。なんて言うの、君、ちょっと可愛い感じだから、弄りたくなっちゃうんだ」
えりは浩太のベルトをはずし、ズボンを降ろすと、同時に自らもしゃがみ込んで体勢を低くした。浩太の足元に跪くとトランクスをずらす。

「うわあ、すごいね。もうカチンコチンに勃っちゃってたんだ」

トランクスの抑えがなくなると同時に、ぴよんと勢いよく飛び出した屹立にえりが目を丸くした。

えりの目前にによきりと突き立った男棹は、鳶のように張り巡らされた血管がひくひくと脈打ち、張りきった亀頭はつるつると淫らな光沢を持って照りを帯びている。

「あの……は、恥ずかしいです……」

「だーめ、それじゃ触れないじゃない。触って欲しいって言ったのは君のほうでしょ？
はい、手はここっ」

生々しく勃起したペニスを明るいところで曝け出すのが恥ずかしく、思わず両手で覆って隠したものの、えりはその手を両脇に避けると、そのまま自分の肩へと置いた。曝け出されたままの浩太のペニスに両手を伸ばすと、輪にした右手で陰茎を掴み、左手を根本に添える。

「うわあ、すごいね。お腹につきそうなくらいピンピンになってる」

「す、すみませんです……」

「別に謝らなくてもいいのに。ヘンなの」

年上の少女はくすりと笑うと、陰茎を掴んだ指先を先端に向けて、ゆっくりと滑らせた。ぐぐつと下腹部に意識が集中し、柔らかな手のひらの感触にぞくりと背筋が震える。

「うわあ、どくどくいつてるのがわかるよ」

えりの指先が亀頭の括れに到達すると、ぐつと尿道が窄まり、それに押し上げられるように、鈴口にこぶりとカウパー液の玉が浮かんできた。みるみる大きく膨らんでいく。その透明の滴にえりは人差し指をすつと伸ばす。

（うわ、ちよつと出ちゃった……）

健康そうな薄桃色の爪がちよこんとついたその指は、よくあんなパワフルなドラムを叩けると感心してしまうほどに華奢だった。

決して誇れるようなものではないが、それなりに雄々しく勃起した男棹と、その可愛らしい指とのギャップが悩ましく、興奮を覚えていると、その指先がそろりと先端の滴を拭い取った。

「あっ！」

「えへへ、濡れてるね」

尿道口にひりりとした快が奔って、背筋がびくりと震えた。カウパー液の滲んだえ

りの指先は、ぬらぬらとした照りを帯びていやらしい。

えりはその指先を持ち上げると、浩太の前に突き出した。親指を重ね合わせると、つーつと透明の色が引く。

「どんどん出てくるね。ね、こうしたほうが気持ち良さそう。どうかな？」

えりは再び股間に手を戻すと、左手で陰茎の根本を支え、右手で亀頭部分をすつぽりと包み込んだ。そうしてくりくりと捻るように手首をスナップさせる。

「う、うううっ！」

亀頭の段に沿って、左右にぐるんと擦られ、もぞもぞつと腰奥が騒いだ。包み込まれた手のひらの中、カウパー液がまたもちゅるりと漏れだす。

「わあ、いっぱい出てきたあ」

えりは、手のひらについた粘液を使い、つるつると滑らせるように亀頭を捏ねくり始める。

（うあっ……人におちんちんを擦られるのがこんなに気持ちいいなんて……）

他人の指で擦られるのは、自分でオナニーをするのとは、まるで違った気持ちよさだった。年上の少女の手で見知らぬ場所へと導かれているという期待感と、甘美な刺激に頭がくらくらとする。

「それにすつごく熱い。ね、苦しくない？」

「ちよつとだけ……苦しいです」

「そうだよね、じゃあ、あたしが楽にしてあげるよ……その代わり、バンドのみんなには秘密だからね」

えりは亀頭を包み込んでいた右手をすつと根本にずらすと、左手を唇へ持つて、人差し指をピンと突き立てた。

「はい……秘密で……」

「うん、ふたりだけのナイショ。いいね？」

浩太が頷くと、えりが上目遣いにした目をきゅつと細めて微笑んだ。そうして、ゆつくりとショートカットの頭を股間へと近づけてきた。

「あ……あぁっ……」

浩太のペニスがゆつくりと、えりの唇へと飲み込まれていった。

口内へめり込んだ先端からぬるりとぬかるみに包まれると同時に、今まで感じたことのない快感が襲ってくる。

「はぁうっ……」

ふつくらとしたえりの唇の中に、根本までペニスが埋まり込むと、漏らしてしまいうような快感が下腹部にじんじんと広がった。

熱くぐつしよりと濡れた粘膜が陰茎表皮に張り付き、ほどよく締め付けてくるのが



たまらない。

「す、すごい気持ちいい……」

思わずため息を漏らすと、えりは口の中にペニスを差し込んだまま、くぐもった声で「よかった」と頷いた。そのはずみに舌が裏筋にじゅるりと掠れて愉悦が芽生える。

「もっと気持ちよくなるよ」

不明瞭で上手く聞き取れなかったが、そう言ったように聞こえた。

（もっと気持ちよくなって……）

ただ唾えられているだけで、これほどまでに気持ちがいいというのに、もつとされてしまったら、どうなってしまうんだろう。未知の快感への期待に背筋がぞくぞくと騒いでしまう。

（あ、あぁっ……）

えりの唇がゆるゆるとした締め付けはそのままに、すつと手前にずらされた。柔らかな唇が陰茎をたどり、下腹に快が奔る。

そのまま、亀頭までたどり着くと、唇を強く窄めて抜いた。

ちゅぱつという水音が脳髓を痺れさせたのもつかの間、また亀頭から、ずぶずぶと唇の内側へと沈み込んでいく。

（す、すごい……別の生き物みたいだ……）

「んっ……」

ジグザグを左右しながら裏筋を舐りあげた舌が、横溝をべろりべろりと往復する。たっぷりと唾液の塗りこめられた陰茎は感度が増していて、柔らかなベロになぞられる度に、精液が陰囊でざわめく。

ふっくらとして艶やかな唇で、ちゅっちゅっつと鈴口にくちづけると、あきは唇をいっただん離して、顔をあげて言った。

「でも、お姉ちゃんに聞いて、想像してたのとはやっぱり違うなあ……」

「どう違うの？」

「うーん。お姉ちゃんは可愛いって言ってたけど、可愛くはない……かな。でも、なんていうか、これが大木くんのだって思うと、すごく愛おしい」

「坂野さん……」

そんなふうに感じてくれているだなんて。感激がぐつとこみあげてきて、胸が熱くなった。あきの身体を抱きしめたい衝動に駆られ、手を伸ばすと、あきの腰をぐつと引き寄せる。

「んっ……な、なに？」

「坂野さん、僕の上に乗って」

腰から尻へと手を滑らせると力を込めた。

「んっ、んっ、んっ、何っ？」

「えっと……僕の上に……」

足元を向いたあきの身体を自分の上へと誘導すると、スカートに隠されたお尻が目の前にきた。あきの顔は、浩太のペニスの上辺りにあるシックスナインの格好だ。

「うわあっ、こ、こんな格好？」

「だって、僕だって坂野さんに触りたくって……」

目の前につんと突き出されたお尻はスカート越しにもぷりっつと丸く突き出していて、プリーツの裾から覗く太ももは、しなやかですらりと眩しい。

「あっ……ひゃんっ……」

手を伸ばしてスカートをめくりあげると、桃のようなヒップがっつると現れた。

両手を尻べたに当ててすりすりつと撫でると、さらさらとした素肌が手のひらに擦れて心地いい。

「すごい、坂野さんのお尻、ちっちゃくて可愛い」

「んもうっ……恥ずかしいよおっ」

あきが顔を真っ赤にして振り返った。

えり仕込みだというフェラチオの舌遣いは驚くほどに大胆なのに、エッチなところを触ったり見たりすると泣きだしそうな顔で恥ずかしがる、そのギャップが可愛らし

くて、もつと困らせてみたいという気持ちが湧き起こる。

「恥ずかしがつてる坂野さんの表情、すごく可愛い。だから、もつと恥ずかしがらせてもいいかな」

あきの左右の尻を手のひらで包み込むと、くつと左右に開いた。するとノーパンのお尻が割れて、薄い董色の排出穴が曝け出された。

「あ……んっ……ダメえ、そんなところ……」

「すごい、ひくひくつて動いてる」

あきの呼吸に合わせて、きゅつと窄まった穴が蠢いて、皺が浅くなったり深くなったりを繰り返していた。ぷつくらと膨らんだ肛門の皺が伸びると、内側のはつとするほどに鮮やかな粘膜が覗く。

「見ちゃだめだよお」

「だめじゃない。もつとよく見せて」

尻の下弦を両手で掬い上げてくつと持ち上げると、ぷつくらと膨らんだ大陰唇と、その真ん中に、すつと縦に入った秘裂が露わになった。淫筋からはちろりと肉色のフリルがはみ出していて、その真ん中は愛液が滲んでいる。

（これが坂野さんの……おま○こなんだ……）

二枚貝のように、ぴつたりと重ねあった小陰唇は、砂糖菓子のように儂げな雰囲気

で、その前部に淡く茂った和毛は、愛液にしっとり濡れてキラキラと月の光を受けて輝いていた。

その手前には、綿棒の先ほどのピンク色の陰核が勃っている。潤みを湛えた宝石のようなその姿に魅せられ、両手の力を込めるとぐっところちらへと引つ張って顔を寄せた。「あひっ……ひゃあっ……」

ぶるぶると頭全体を動かしてあきの淫部に顔面を埋めると、唇から舌を出して淫裂を探った。舌を割り入れながら奥へと挿し込むと、苺ジャムをたっぷり混ぜ込んだヨーグルトのような、甘酸っぱい愛液がとろりと口内へと広がる。

「はあ……ああっ……坂野さんのおま○こ、美味しい……」
奥から沸きあがってくるジューシーな愛液に、ぴちゃぴちゃと舌鼓を打ちながら鼻先でクリトリスを探ると、ぐにぐにと捏ねつける。

「んっ……ああ……恥ずかしい……のに……」
あきが腰をがくがくと震わせて熱いため息を吐いた。そのウエストを掴んだ指先に力を込めると、舌をずらして陰核を探り当てる。

「ああっ、ひっ！ ひゃうっ!!!」

クリトリスを舌先でれろりと舐めあげると、あきが海老反りに背中を跳ね上げた。けれども、押さえ込んだ力を弱めることなく、クリトリスをすっぽりと唇で包み込ん

で舌で押し潰す。

「あっ……ひあっ……くはあうっ……」

快楽神経がたっぷりと詰め込まれた淫核を集中的に責め込まれ、あきが悲鳴に似た喘ぎ声をあげた。愉悦に弛緩し、ぱっくりと割れた秘裂からはどぼどぼと愛液が溢れ出して、浩太の鼻先や頬に滴り落ちていく。

ちゅぶっ、ちゅくっつ、くちゅっ、ちゅっ。

唇を窄めると陰核を亀頭に見立てて、シゴクように出し入れした。

すると、クリトリスを覆っていたフードが根本までずると剥け、押さえを失くした花粒が、ぷつくらと膨らみを増していく。

「ああ……ああああっ……」

浩太の上で身体を弛緩させて震わせるあきの唇から、とろりと唾液が零れ落ちて、浩太の下腹部へと垂れた。

滴を受けてピクン、と震えるペニスを目にして、その存在を思い出したように、あきが上半身を折って再び顔を沈める。

「ああっ……うっ……」

興奮に屹立しきった若棹が、ぬぶぬぶとあきの唇の中へとめり込んでいく。入った部分からヌルリとした唾液が絡みつき、痺れるように甘く愉悦する。

「んっ……はぁ……んくうっ……ちゅっ……」

あきはぱっくりと根本まで唾え込むと、鼻から息を漏らしながら、キュウツとバキユームさせて口内を真空させた。へこんだ内頬が陰茎にぴったりとくつついて、絞られるような快感に腰がひくりと動く。

「ああ、坂野さん……そんなに絞めたらダメだよお」

「なんでダメなの？ 気持ちいいでしょ。大木くんのおちんちんの先っぽから、なんかいっぱい出てきてるの、わかるよ」

あきは口内粘膜をみっちりと棹肌に密着させて締め付けたまま、亀頭を転がすように舌先でろれろと舐めあげた。精道からどくどくと精液が逆上して、すぐにでも漏らしてしまいそうに気持ちがいい。

「だって……坂野さんをもっと気持ちよくしてからじゃないと……」

少女の淫らな口戯に負けじと、浩太は指先であきの秘裂を割り開くと、その濡れた肉へと舌を這わせた。サーモンピンクの淫らな雌肉にわずかに開いた膣口を探り当てると、そつと舌をねじ込む。

きゅつと締まった処女膣の中に舌先をめり込ませると、チーズのような濃厚な愛液が舌へと絡みついてきた。

「ああぁ……ひゃあぁつ……」

初めての異物に驚いてざわついていている膣壁の粒に、舌表をこすりつけると、あきはペニスを加えたまま、喉から声を漏らした。

「坂野さんの内側を舐めてるんだ。わかる？」

舌先を抜き挿しすると、ちゅぷちゅぷつとイヤらしい水音が響いた。

唾液と入り混じった白濁した愛液を人差し指で掬うと、クリトリスに塗りつけてぶるぶると擦り上げる。

「あぁっ……あひゃあぁ……ひいつ……」

ペニスを咥えこんだままあきが呻き、それに釣られ、口内の粘膜が複雑に蠢いた。

(ううっ……あぁっ……)

今にも爆発しそうな下腹部の昂悦にこらえながら、あきの淫裂を貪り舐めると、唇を吸盤のように押し付けて、ちゅうちゅうと吸い込みあげる。

根本まで曝け出された淫粒は、吸えば吸うほどに血が巡って、次第にとくんとくんと鼓動を始めたのがわかった。

「あぁっ……大木く……大木くんっ……」

あきが耐えきれずにペニスを口から零れ落とすと、浩太の太もものにぎゅつとしがみついた。熱く火照った乳房がぴったりと腹部と重なり合って、滲んだ汗で密着する。

ちゅぶつ、くちゅつ、ちゅるつ。

処女肉を解すように舌を出し入れしながら、ぴんと突き立ったクリトリスを指先で揺らすと、奥から奥から、ねつとりと濃厚さを増した愛液が溢れてくる。

（坂野さんを……イカせたいっ！）

初めての快楽を自分の手で教えたいという欲望がふつふつとこみあげてきて、浩太の扇情を加速する。

高速で指先を動かして、クリトリスを左右に廻るとますますぷつくらと突き立つて大きくなっていく。

「あぁっ……あああぁっ……ひゃうふっ……あひぁあぁっ」

恥ずかしがり屋の少女が必死に耐えようと、腰は勝手にびくびくと跳ねあがり、可愛らしい唇からはあられもない声が漏れ出てしまう。

「自分で、自分で乳首も触ってみて……そっちのほうが気持ちがいいから」

快感に正気を失くしつつある少女の姿に煽られて言う、あきは一瞬、泣きそうな顔で振り向いた後、こくと頷き、両乳房を抱き込んで親指と人差し指で乳首を潰した。

（す、すごい、坂野さん。エッチになってる……）

恥じらっているあきも可愛かったが、こうして羞恥の壁を破ってくれたあきも、愛おしかった。どうにかして達してもらいたいと、クリトリスの根本を指で掴んだまま、

唇で飲み込んで強く吸い上げる。すると、あきは耐えられないとばかりに指先で自らの乳首をこりこりと挟みあげる。

「ダメ、すごい……こんなの……あああつ！」

快感に耐えかねて逃げそうになるあきの細腰をぐっと掴むと、さらに吸い付きを強めてスロートする。

「あひつ……ひゃあつ……ひゃああつ！」

次の瞬間、ビリビリッと感電したようにあきが身体を震わせた。

身体中に迸る快の衝撃に耐えきれないというふうに、少女の身体がびんつと跳ねあがると、大量の愛液がぼつちりと開いた膣口から溢れ出てきた。口の中で淫豆が生きのいい小魚のようにビクビクッと跳ねて、痙攣を始める。

「あああつ……ひつ……ひつ……ひあうつ……うくつ……！」

少女は浩太の顔に馬乗りになったまま、うわ言のように呻き声を漏らす。数回、痙攣を繰り返した後、弛緩したのか両手が乳房からぼろりと剥がれて、身体の横へとだらんと垂れ下がった。

「坂野さん……すごい……イってくれたんだ……」

「ズルい……ズルいよ……あきだって、もっと大木くんを気持ちよくしたかったのに。あんなふうにするから……何もできなくなっちゃって……」

あきはばつの悪そうな微笑みを浮かべながら、肩からころん、と床に転がると、浩太の横へと寝転んだ。

「でも、僕は坂野さんの……普段見られない姿が見られて、嬉しかったな。自分でおっぱい触っててすごくエッチだった」

「もうっ。そういうこと……言わないで」

「ごめんごめん」

顔を真っ赤にして抗議するあきの、汗で額にびっちり張り付いた前髪を、優しく掻き分けると、額にキスをした。唇と離すと、まだ快感を残した瞳のあきとぱちりと目が合う。

「それに……あきでいいよ」

「えっ!？」

「だから……なんか坂野さんじゃなくって、あきって呼んで欲しいなって。ダメ？」
「だ、ダメじゃないけど……じゃあ、あ、あきちゃんも、僕のこと、浩太って呼んでよ」

「えっ！ 本当に？ 恥ずかしいなあ……」

あきが顔を真っ赤にして横に振った。また恥ずかしがり屋が出たかと苦笑すると、あきの身体を抱きしめる。

「あき、好きだよ」

「……あきも。あきも好きだよ……こ、浩太のこと」

あきは睫をふるふると震わせると、目を細めて浩太を見上げた。

(な、なんて幸せなんだろう……)

感激にじんと胸を打たれてもう一度、あきを強く抱きしめる。と、あきがまだ勃つたままの浩太の下半身の勃起に気が付いて囁いた。

「……ちよつと待つて。ねえ、浩太。まだ浩太のここ、大きいままだよ」

「う、うん……確かに……まだ治まってないね」

「じゃああき、続きしようよ」

あきは誘うように、浩太の下腹部に指を伸ばすと、剥き出しの屹立を手のひらで包んだ。まだジンジンと欲情して痺れを持っているペニスが、お臍にくつつきそうにビクンと跳ねてしまう。

「続きつて……い、いいの？」

「うん……あきは浩太と……もつと親しくなりたいな。あきたちさ、両想いなんだし、別に問題なくない？」

「あきちゃん……」

もう我慢ができなかった。

浩太は手を床について起き上がると、あきに覆いかぶさった。太ももの間に手を差し込むと、ぐっと膝裏に手を当てて持ち上げる。

秘裂にアタリをつけて亀頭を押し付けると、身体をぐっと前に倒して少女の身体を抱きしめた。

「痛かったら……我慢しないで言っただけね」

「うん、大丈夫、浩太、優しいね」

わずかに10センチほどの距離で、あきの顔をじっと見つめながら右手を添えたペニスをゆっくと沈める。

「んっ……んんっ……」

少しずつ、少しずつ腰を突き出すと、亀頭が膣口にめり込んだ。さらに押し進めると、ぬぶ、と雌穴が広がって張り出しが吸い込まれていく。

「あああっ……っ。い、痛っ……」

「ご、ごめん、大丈夫？」

亀頭の頭が二センチほど入ったところで、あきが悲鳴を漏らした。慌てて動きをストップすると、表情を窺う。

「んんんっ……た、たぶん、大丈夫」

「無理だったら言っただけね」

男はただ気持ちがいいだけなのに、女のコの初めてには痛みが伴うだなんて、可哀想に思うから、せめて少しでも痛みを感じずにしてあげたい。もちろん、今すぐにあきと結ばれたい気持ちも強くあったが、それで焦って嫌われるのは嫌だった。

「ううん、大丈夫。我慢できるよ」

「本当に？」

「うん……っていうか、我慢する。だって浩太とひとつになりたいもん」

「ありがとう……あきちゃん」

大切なものを捧げてくれようとしている少女の気持ちに、ジンと胸を熱くしながら、あきの手のひらに自分の手のひらを合わせて指を絡めると、ぐっと腰を突き出す。

「んんっ……んんっ……あああっ」

メリメリつと膣肉を割って亀頭がすっぽりと中へと入った。あきは、浩太と組ませた指先に力を込めると、痛みに耐えるように目をぎゅつとつぶった。

「もう少し、もう少しだからね……」

さらに腰を突き出すと、ゆっくりゆっくりと熱く滾ったあきの膣道へ、ペニスがり込んでいく。

（ううっ……それにしても……やっぱりすぐくキツイ……）

今まで何物にも犯されたことのない処女地は、びっくりするほどにきつくて狭かつ

た。膣肉こそ、先ほどまでの愛撫で解れて柔らかだが、それでも穴自体の直径が小さくて、きゅつきゅつと引っかかり引っかかりしてようやく進んでいく。

無理やりにねじ込めばすぐに入るかもしれないが、無理やりなことはしたくなかったし、第一、陰茎への締め付けが強すぎて、あまり激しく挿入するとうっかりイってしまいそうでもあった。

すぐにでも爆発しそうな愉悅に耐えながら、腰を奥まで挿しきると、自然とため息が漏れた。押し出されるようにして膣口に溢れてくる愛液は、破瓜の血が混じってかすかにピンク色がかって見える。

ひとつになれた歓びを噛みしめながら、初めてを捧げてくれた少女の指をぎゅつと握り返した。

「あきちゃん、もう奥まで……入ったよ」

「ん、んんっ……わわっ、本当に!!」

「うん。全部、あきちゃんの中に入ってる」

ペニスをずっぼりと包み込んだあきの内側は、熱くぐじゅぐじゅにぬかるんでいた。こうして挿し込んだまま、じっとしていて、まるで浩太の屹立の形にカスタマイズするかのように膣粘膜が蠢き、陰茎表皮にぴったりと密着してくる。

「すごい、嬉しいよ、浩太」

両手をこちらへと伸ばしたあきの頭ごと、ぴっちり上半身を重ねて抱きしめると、どくどくという心臓の鼓動が浩太の胸板を心地よくノックする。

「ゆっくり動くけど……痛かったら言ってね」

「うん、大丈夫。もう痛くはない……かな」

「強がらなくていいから」

「浩太、優しいね……んっ」

あきが首に手を巻きつけると、さらに身体が密着した。

汗ばんだ肌が吸い付くようにぴったりと馴染み、このまま溶けて入り混じってしまったのではないかとさえ思える。

「じゃあ、動くよ」

腰をくいと引くと、膣内の粘膜が陰茎を離すまいと、ぴっちり張り付いてきた。収着する濡れ粘膜の感触に、ペニス表皮の性感神経が愉悦して、びりびりと腰奥が痺れる。

「あぁっ……んっ……」

交接部からは、じゅぶりじゅぶりと淫猥な水音が響き、攪拌されて白濁した愛液がじゅぼりと染み出してペニスを濡らす。その愛液を再び送り込むように腰を押し戻すと、膣肉がきゅうつと窄まって龟头を絞る。

「はあ……あきちゃんの中、すごくキツキツで、すぐにイっちゃいそう」
「いいんだよ。気持ちよくなってるね」

少しだけ余裕ができてきたのか、首の後ろに回されたあきの腕の力が緩んだ。身体を動かす幅に余裕ができた分、腰を大きく引くと、再び奥へと突き立てる。

「あきちゃんっ、あきちゃんっ」

愛おしい少女の名前を繰り返しながら、腰を抜き差しすると、だんだんと頭がぼやけてきた。何度か経験したにもかかわらず、まるで初めてのセックスをしたかのような達成感と幸福に包まれて脊髄がずくずくと震える。

（ああ……ダメだ……止まらないっ……）

腰が勝手にガクガクと震えて、前へ前へと突き出してしまふ。

「ああ……ふ、深いっ！」

少女の身体を抱え込み、下半身を奥に思いきり突き立てると、柔らかな子宮に突き刺さったのか、少女が身体を仰け反らせた。

「あつ、ごめ、い、痛かった？」

「だ、大丈夫。び、びっくりしたただけだから……痛くないし……気持ちいい……」

初めて受けた子宮へのダイレクトな刺激に、あきは驚きながらも腰をぐつと持ち上げて擦りつけてきた。

「えっ、き、気持ちいい!」

「うん……お腹の奥の、さつきからずつとジンジンしてるところに当たって……気持ちよかったよ」

「そ、そっか……じゃあ……」

それならば、と思い上半身を起こすと、腰をぐつと掴んだ。そうして、一番奥に叩きつけるようにペニスを挿し込む。

「あっ……ひっ……ひゃあっ! ううっ、ここ、ここの中で当たってるよおっ」

屹立を根本まで埋め込むと、あきが身体をびくと震わせて平らな下腹を両手で押さえた。

「うん、わかるよ……ほら……こうだよね」

根本まで押し込んだまま、ぐつぐつと腰を左右にスライドさせて子宮口を責めると、あきが泣きそうな顔をしながら、こくこくと細かく頷いた。

「こんなところ、自分でも触れないのに……浩太に触られちゃってるよお……」

「そうだよ、あきちゃんの子宮に、僕のおちんちんがくつついちゃってるんだ」

さらにぐにぐにと腰を強く押し付けると、ポルチオから排出される新鮮な愛液が亀頭をずぶりと濡らした。

「もっと……もっと強く押してあげる」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>